

2026 年 8 月 2 3 日 聖霊降臨節第 1 4 主日礼拝次第
主日礼拝

前 奏 (黙 想)

招きの言葉 イザヤ書5章 1～2 節 (旧約 1067 ㊦)

讃 美 歌 413 (キリストの腕は)

主の祈り <A> (讃美歌93-5)

詩 編 交 読 詩40編 1～12 節 (交読詩編 48 ㊦)

聖 書 マルコによる福音書12章 1～12 節 (新約 85 ㊦)

祈 禱

讃 美 歌 505 (歩ませてください)

説 教 「ぶどう園と農夫」 田中耕大

(平和学園アレセイア中高教務教師)

讃 美 歌 471 (勝利をのぞみ)

信 仰 告 白 使徒信条<A> (讃美歌93-4)

献 金

讃 美 歌 88 (こころに愛を)

派 遣 祝 福

後 奏 (黙 想)

報 告

※讃美歌は原則として全節を歌います

主の祈り A (讃美歌21 93-5-A)

天にまします我らの父よ、ねがわくはみ名をあがめさせたまえ。

み国を来らせたまえ。みこころの天になるごとく 地にもなさせたまえ。

我らの日用の糧を、今日も与えたまえ。

我らに罪をおかす者を 我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ。

我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ。

国とちからと栄えとは 限りなくなんじのものなればなり。 アーメン。

聖 書 マルコによる福音書12章 1～12 節

「ぶどう園と農夫」のたとえ

1 イエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。2 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。3 だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。4 そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。5 更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。6 まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。7 農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』8 そして、息子を捕まえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。9 さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。10 聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、

これが隅の親石となった。

11 これは、主がなさったことで、

わたしたちの目には不思議に見える。』

12 彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと感じたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残して立ち去った。

讃美歌413番

- 1 キリストの腕は 地のはてまで。
文化も生まれも すべて超えて。
- 2 東西南北 ひとつとなる。
キリストの愛は すべてむすぶ。
- 3 思想や隔たり 関わりなく、
友として招き、愛される主。
- 4 世代、民族の 壁を砕き、
人をそのままに 受け入れる主。
- 5 キリストにならい 私たちも
違いをよろこび 受け入れ合おう。

讃美歌505番

- 1 歩ませてください、真実もとめて
労苦を惜しまず 仕えあう道を。
- 2 導いてください、愛のみ言葉で
主よ、この私を なすべきつとめに。
- 3 悟らせてください、たじろぐことなく
不正にうちかつ 信仰の道を。
- 4 歩ませてください、みあとに従い、
希望に輝く 平和への道を。

讃美歌88番

心に愛を 豊かにみだし
日ごとのわざに つかわしたまえ

讃美歌471番

- 1 勝利をのぞみ 勇んで進もう、
大地ふみしめて。
ああ、その日を信じて
われらは進もう。
- 2 恐れをすてて 勇んで進もう、
闇に満ちた今日も。
ああ、その日を信じて
われらは進もう。
- 3 手をたずさえて 歩もう共に、
勝利のときまで。
ああ、その日を信じて
われらは進もう。
- 4 平和と自由 主はいつの日か、
与えてくださる。
ああ、その日を信じて
われらは進もう。